

## 溜め池

作：セフェーリス

訳：浮 田 三 郎

イオルゴス・アポストリデイス様

私は、ドン・ファン・タペラの病院を模型の形で置かなければならなくなりました、というのは、それがピサングラの門を被い隠すようになったからだけでなく、その円屋根が町を抑えるような形で聳えてしまったからでもあるのです。そして、このように一度それを模型のように置き、その場所から移してみると、他の側面よりもその前景を見せる方が好ましいようにみえるのです。町の中のその位置に関しては、地図の中で分かります。

ドミニコス・セオトコブーロス \*

ここに、大地に一つの溜め池が根を下した  
秘蔵する秘密の水の巢が。  
その屋根は大きな足音。星は  
その心を混ぜ返さず。日は  
日を重ね、開いては閉じ、それには触れず。

上の世界は扇のように開き  
風のそよぎと遊び  
昼下がりに消えていくリズムで  
絶望に羽ばたき動悸がする  
刻まれた痛みの口笛の中で。

無情な夜の円屋根の盛り上がりの上を  
心配が踏み喜びが通り過ぎていく  
運命の素早いカタカタという音で  
顔が明るくなり瞬間輝き  
そして黒檀の暗闇の中に消えていく。

去りゆく姿！一連の瞳は  
一条の溝に置かれ苦々しく回る  
そして最後の日の印が  
姿を取り去りより近くに運ぶ  
賠償金は求めぬ大地の暗黒の近くに。

大地に人間の身体が屈む  
渴いた愛が残るように；  
時の接触の中で大理石になった  
像が豊かな胸に裸で倒れる  
優しく優しく像を甘くする胸に。

愛の渇きが涙を求め  
蕃薇はおじぎをする—私たちの魂—  
木の葉の中で創造の脈動が聞こえる  
黄昏が通行人のように近づく  
その後夜がそしてそれから墓が．．．

が、ここ大地に一つの溜め池が根差した  
秘密の、暖かい巢、それは秘蔵している  
風の中にそれぞれの身体のうちめき声を  
夜と 夜と の戦いを、  
世界は広がり、通り過ぎ、それには触ず。

時が過ぎて行く、多くの太陽がそして多くの月が、  
が、水は鏡のように堅くなっている；  
期待は大きく見開かれた瞳と共に  
期待を育む海の端に  
全ての帆が沈む時。

ただひとつ、その心の中にもこれほど多くが  
ただひとつ、その心の中にもこれほどの骨折りが  
そしてこれほどの痛みが、ただ一滴一滴ずつ  
苦きうねりで生きる  
この世に遙か網を打ちながら。

波が抱擁から出てきた時  
抱擁の中で終わってくれたらよかった  
砂浜で愛を  
波の線を壊す前に私たちに与えてくれたらよかった  
波が 砂の上に泡を残したように。

獣皮のように広げられた  
眠っている野獣のように馴らされた暖かさ、  
動悸を静かに避け  
銀の滴が落ちる垣根を求めて  
眠りをノックした野獣のように。

そして隠れた一つの身体、  
死の洞窟から取り出された深い叫び、  
溝の中で生き生きとしている水のように  
草の上で輝き  
ただひとり 黒い根に話している水のように...

お！私たちの命の根にもっと近く  
私たちの考えよりも心配よりも！  
お！私たちの厳格な兄弟よりももっと近く  
閉じた眼で私たちを見つめる兄弟よりも  
そして槍よりもなお私たちの側に！

お！私たちに触れると突然柔らかくなってくれ  
私たちを締め付ける沈黙の皮が、  
私たちが忘れるように、神々よ、  
いつも大きくなりいつも私たちに重くのしかかる罪を、  
知識からも飢えからも私たちが出ていけるように！

私たちの傷の痛みを集めて  
傷の痛みから出ていこう、  
私たちの身体の痛みを集めて  
身体の痛みから出ていこう、  
薔薇が私たちの傷の血の中に花開くように。

全てが再び最初ようになってくれ  
指に 眼に そして唇に、  
私たちが老いた病に別れを告げられるように  
蛇が残したぬけがら  
緑の三つ葉の中で黄色。

大きくて純潔の愛、静寂！  
生き生きとした熱の中で ある晩  
おまえは謙虚に屈んだ、裸の曲線、  
群れをおおう白い羽根  
優しき寺院の上の手の平のように。

おまえを連れて来た海がおまえを連れ去った  
遙か花の咲いているレモンの木々に  
運命が甘く目覚めた今  
三本の単純な皺のある何千もの顔  
埋葬行進\*に据えられた顔。

没業運びが挽歌を引っ張る  
人類の希望が続くように  
目に炎で楔留めされた希望が  
盲目の大地を照らしながら  
春の骨折りで汗する大地を。

遙かなる世界の炎、漁火  
今日湧き出る春の上の、  
死んだ花輪を悲しんでいる陰  
足音．．．足音．．．緩やかな鐘の音が  
一つの暗い鎖を解くー

「私たちは死ぬ！私たちの神々は死ぬ！．．．」  
大理石は それを知っている  
白い夜明けのように生贄の上を見つめて  
見知らぬ、大きな臉の、断片、  
死の群集が通り過ぎて行く時に。

.....  
.....  
.....  
.....  
.....

彼等は遠く通り過ぎていった、  
短くなった聖燭の近くで熱くなった悲しみと共に  
聖燭は彼等の前屈みの額に書いていた  
真昼の至慶の命を  
呪文と星が消えていく時に。

しかし夜は夜明けの存在を信じず  
愛は死を編むために生きる  
かく、自由な魂のように、  
沈黙を教える一つの溜め池  
炎と燃える国の中で。

注 \*溜め池 (Η ΣΙΕΡΝΑ) : この詩は、最初、1938年にアテネで出版されているが、今回翻訳したものは、セフェーリスの『詩集』(第九版、イカロス、アテネ、1974)の中に掲載されているものである。また、George Seferis, Collected Poems, Translated, Edited, and Introduced by Edmund Keeley and Philip Sherrard, Princeton Univ. Press, 1981, Expanded Edition. も参考にした。また、詩人セフェーリスに関しては、関本至、『現代ギリシアの言語と文学』, 溪水社, 1987 Linos Politis, A History of Modern Greek Literature, Oxford Univ. Press, 1975, Reprinted. などに詳しく紹介されている。

\*ドミニコス・セオトコプーロス : (1541年~1614年) クレタ生まれの画家、建築家、彫刻家でスペインで活躍した。別名エル・グレコの方がよく知られているが、これはスペイン語でギリシア人という意味である。

この引用文は、彼の絵「トレドの景観と凶面」(トレドのグレコ美術館蔵)の中のトレドの町の凶面について、エル・グレコ自身によって書かれたものである。

\*埋葬行進 : 正教の聖金曜日(復活祭の前日)の儀式の中で、キリストの埋葬式が、教会とその教会がある村や地方を死んで横たわるキリストの画像を運んで回ることによって再現される。この画像は、普通一枚の布地に刺繍されたもので、この行進は埋葬行進として知られている。